

『NINGAWA 十二夜』は、 怖れを知らぬ冒険か

歌舞伎化されたシェイクスピアを上演する

はせ せべ ひろし
長谷部 浩

東京藝術大学美術学部准教授



はせべ ひろし ●慶應義塾大学卒業。現代演劇、歌舞伎を中心に評論。著書に『菊五郎の色気』『野田秀樹論』『坂東三津五郎 歌舞伎の愉しみ』（編者）、『演出術』（蛭川幸雄との共著）など

中世から現代まで生き延びてきた
演劇に共通する精神を確かめる

歌舞伎化されたシェイクスピアをロンドンで上演する。それは怖れを知らぬ冒険と言うべきなのだろうか。

歌舞伎の歴史はもちろん、シェイクスピアの上演史においてもきわめて特異な公演が、この3月24日から、ロンドンのバービカンシアターで行なわれた。17世紀の初め、歌舞伎の原型となるかぶき踊りを、阿国あくにが女院御所で披露したと記録に残ったちょうど同じ時期に、シェイクスピアもまた、ロンドンで『十二夜』を上演している。英国と日本、中世から現代まで生き延びてきた演劇に共通する精神を、この公演によって確かめることができるか。私のひそかなもくろみは、そんなところにあった。

シェイクスピアは、おそらくは世界の劇場でもっとも上演回数が多い劇作家である。英国の劇作家として遇する

よりは、人類の財産と考えたほうがふさわしいとさえ思う。シェイクスピアの作品は、時代によって風化されることなく、今も独自の解釈がほどこされ、国境を越えてローカライズされて新たな舞台を生み続けている。シェイクスピアを原作とした「アフター・シェイクスピア」の一作品として、ロンドンでいかに受け入れられるか。期待とともに、不安も少なからずあった。

世界的に知られた演出家と
歌舞伎を代表する大立者が出会う

『NINGAWA 十二夜』の成り立ちについて、簡単に触れておきたい。2004年春、『NINGAWA 十二夜』は、新作歌舞伎の実現を志した尾上菊之助が、周囲と相談しつつ自ら立案した企画である。父、菊五郎の了解を得て、演出はシェイクスピアの大胆な解釈で世界的な評価を得ている蛭川幸雄に、菊之助が直接、依頼した。

獅子丸、琵琶姫、および斯波主膳之助の三役を務めた尾上菊之助（左）と演出の蛭川幸雄
写真提供：松竹株式会社（以下も同じ）

市川海老蔵襲名披露のために、パリ・シャイヨー宮国立劇場に出演していた菊之助が、たびたび携帯電話で連絡を取っていたのを覚えていた。

制作サイドにこの企画が伝えられたのは冬になってからで、この年も押し詰まった12月30日、演出中の舞台を抜け出した蛭川と尾上菊五郎の初めての打ち合わせが、渋谷の「ドウマゴバリ」で実現した。シェイクスピア作品の演出で世界的に知られた演出家と、現代の歌舞伎を代表する大立者が、お互いを尊重しつつ、話し合いを進めていく姿が印象的だった。初演は05年7月、歌舞伎座。連日、満員の観客を集め、07年6月博多座、7月歌舞伎座の再演を経て、今年3月のロンドン公演へと至ったのである。

私がロンドンに到着したのは、3月22日のことだった。主なキャストは19日に現地入りしていたが、劇場で稽古が行なわれたのは21日のみで、22日は劇場自体が休日であったから、私は23日、稽古2日目から立ち会うことになった。

稽古開始は11時からだという。その1時間前には劇場入りしたのだが、案の定、蛭川はすでに客席中央にしつら

えられた演出席にいた。舞台稽古は、演出家にとつての本番に相当する。ひとたび公演が始まってしまえば、演出家は舞台を途中で止めることはできない。緊張感のある舞台稽古は、よい作品ができるための最低条件である。私は長旅の疲れも見せぬ蛭川を見て、頼もしく思った。

バービカンシアターの客席は、欧米によくあるすり鉢型で、しかも、それぞれの列は上手から下手までつながっており、通路は1本もない。したがって、歌舞伎に不可欠とされる花道を設置できない構造を持っている。そのため、舞台の最前面に下手袖に通じる区切った通路をつくり、花道に見立てる工夫をほどこしている。

花道を使って俳優の出入りを効果的に行なう演出手法は、歌舞伎の根幹に関わっている。この手法を封じられたところで、蛭川はロンドンで初めての歌舞伎作品を発表しなければならぬ。そのプレッシャーは相当のものがあると思われた。

本舞台と一体になった仮花道では効果 halves されないか

この日は、第二幕目を通し、さらに

冒頭、第一幕、第二幕を通して稽古する予定であった。まだ、この作品に慣れぬ現地の大道具スタッフが、転換の準備のために、舞台が進行しているにもかかわらず、バックサイドで大きな物音を立てる。蛭川が苛立つ。通訳を介して再三注意するが、改まる気配がない。休憩中、見かねて「彼らもプロなんだから、本番になったらちゃんとやるでしょう」と蛭川に声を掛けると、「そうあって、ほしいものだよね」と表情はにこやかではあるが、厳しい返事が返ってきた。

歌舞伎俳優は、古典の上演では3日の稽古で初日を開けてしまうプロ中のプロである。二幕目では緩く思えた場面も、初めての通し稽古になると、演技そのものの精度をあげてくる。斜め後方にいた装置の金井勇一郎に「上がってきましたね」と話しかけると、「さすがですね」と返してきた。

金井ばかりではない。脚本の今井豊茂、演出助手の浅香哲哉、照明の勝柴次朗、音響の田中剛二、音楽の笠松泰洋、振付の尾上青楓、とスタッフが蛭川のそばに控えていた。英国では、劇場スタッフはユニオンの規定が確固として定まっております、長時間労働は許さ

幕切れのシーン。去りゆく捨助を一行に並んだ登場人物が見送る

れない。限られた稽古時間のなかで、最善の結果を出そうと、メイン・スタッフが、蜷川を支えるために張り詰めている様子が感じられた。

通し稽古を観ているうちに、一つの疑問が生まれた。歌舞伎座、博多座では浮かびもしなかった疑問であった。幕切れ、尾上菊五郎が演じる捨助が花道を引つ込む最後の場面である。

これまでは、舞台から直角に客席を横断する花道があった。捨助が「風の向くまま、気の向くまま、流れ流れてどこまでも、もうおさらばでござりまする」と別れを告げ、花道で立ち止まると、二組のカップルが誕生したにもかかわらず、この場を去って旅に出る道化の心情が生き生きとして見えてくる。人生の無常ささえ漂う。けれども、今回の本舞台と一体になった仮花道では、その効果が半減されるのではないか。私は、この意見を蜷川に伝えるべきか、迷いに迷った。現代演劇の世界では、演出家は絶対の存在であるかわり

に、すべての責任を取る。歌舞伎の場合、建前上はそうなっているものの座頭である菊五郎の意向もあるだろう。その関係性はお互いへの尊敬でなりたっているものの微妙である。現代演劇では、たまたま居合わせた稽古場で、何らかの意見を演出家に具申したことはあるが、この海外公演の緊張した場で、ゲネプロの1日前にこのような進言をしてよいものだろうか。

何を進言しようと、結局のところ判断するのは、蜷川であると私は思った。私は舞台が少しでもよいものになるために、できることを、すべてやってみるほかに、迷ったあげく、私は下手通路に出た蜷川に意見を伝えた。蜷川は、「僕も」そう思う。菊五郎さんとも話してみよう。どうするかは、明日のゲネを見てからだね。直すのであれば、そのときにします」と短く答えた。

**幕切れの演出に変更を加えないまま
ゲネプロはあっけなく終わった**

翌24日は、午前11時半から第一幕のゲネプロが始まった。午後7時からの本番を直前に控えての最

終稽古である。「(舞台を途中で)止めないよ」との予告通り、この最終稽古は間に休憩を挟んで滞りなく行なわれた。捨助の最後の台詞が終わり、定式幕が閉じられる。カーテンコールを想定して、幕がまた引かれ、出演者がお辞儀を繰り返す。すべてが終わった。蜷川が幕切れの演出について、なにか指示をするのではないか。私は身構えるようにして待った。

「ごくろうさまでした。それではいよいよ本番です」と、蜷川の短いコメントがあり、ゲネプロは、あっけなく終わった。

蜷川は私の1列前、中央の演出席にいた。何か話そうかと一瞬、思いかけたが、私は、立ち上がることができなかった。蜷川はふつと立ち、下手の通路に向かって歩き出した。私の前を通るときに、なぜか軽く頭を下げた。異例のことである。昨日の意見に対する礼なのだなと、私は受け取った。

以降、蜷川が帰国するまで何度も話をしたが、幕切れの演出についてはお互い何も触れなかった。

後日談がある。初日が開いて3日目、菊五郎の長女にあたる女優の寺島しのぶが劇場に現れた。舞台が終わってか

ら、久しぶりなので
会おうという話にな
り、ホテルのバーで
菊之助、ふたりの所
属事務所の社長と4
人で話をした。

寺島は歌舞伎に対
して、これまでも鋭
いコメントを発する
のを知っている。今
日も舞台に対してど
んな感想を持つのか
興味があった。彼女
は、幕切れの引っ込
みについて話し出し
た……。

意見の一致に私は
驚いた。寺島と私は、
ならばどのように幕
切れを演出すればよ
り効果的かという話
に進み、捨助が朱の
太鼓橋を舞台奥に去
っていくようにして
はどうか、振り返る
捨助を一行に並んだ
他の俳優たちが半身
になり見送るのはど

うか、それならば、自由を求めて旅立
っていく捨助のメンタリテイもよく表
現できるのではないか。

話が盛り上がるうちに、私はふっと
我に返った。

「僕たちが考えつくような演出プラン
を、蜷川さんが思いつかないわけはな
いですよ。だとすると、ゲネプロか
ら本番までの短い時間のなかで、演出
を変更することの弊害のほうが大きい
と判断されたのではないかな」

初演、再演と積み上げてきた演出。
また、ロンドンから帰ってからは、新
橋演舞場、松竹座と花道が備わった劇
場へと戻る。こうしたさまざまな状況
を勘案したうえで、演出家は最終的な
決断を下したのだと、ようやく腑に落
ちた気がした。

歌舞伎公演としての特異性よりも 蜷川の作品として評価された

話は初日に戻る。私は本番の前に2
度、関係者として通し稽古を観ている。
その上での観劇なので、評論家として
舞台のよしあしをあれこれいうのは差し
控えたい。事実として報告できるのは、
カーテンコールが万雷の拍手であり、
観客が好意的にこの舞台を受け入れた

新聞各紙の劇評はおおむね好評だったが、一部には懐疑的な評を掲載した新聞もあった。「インディペンデント」(右)と「イブニング・スタンダード」(下)の劇評

Shakespeare in a Japanese pantomime style

THEATRE
Twelfth Night
Belfrage, KC
★☆☆☆
NICK CURTIS

THIS is hard going. Japanese director Yuho Ninagawa adapts a powerful international reputation but has always struck me as a creator of beautiful images without much substance. His Twelfth Night is a grand house longer than Michael Coady's superbly evocative recent West End production. And his decision to adapt a Shakespeare play for the Shōheisha Grand Kabuki company seems a far less productive act of 'cultural translation' than the more innovative Shinjū, staged by Shiro Kishimoto and Junji Sakaguchi, because of the far more subtle and this year's Ninagawa's show is more than a little bit of a show and a half.

It is not Kabuki always that is the best choice to point. There is the same suspension of common sense and performance, the standardised bits of business, the cross-dressing. And here

the line comedy remains weak but, once Kikugoro VII, second of a Kabuki acting dynasty stretching back four centuries, is a superb, over-the-top, outrageous Melville, loved by his troupe members. However, in being with the Kabuki tradition of 'pantomime', or 'guy' changes, he keeps playing off stage as a woman in a rather more elaborate, and less convincing, than the original's. The play's story is a woman disguised as a man, and her brother's Captain, who then falls in love with her. The play's story is a woman disguised as a man, and her brother's Captain, who then falls in love with her.

Cast members:
Nakamura Utaemon
Van Oort
Oscar Kikugoro VII
in Malvern

Box Office:
Tel: 01223 333333 (01223 333333)
www.belfrage.org.uk



A classic, lost in translation

THEATRE
Twelfth Night
Belfrage, KC
★☆☆☆

Shakespeare has had some of the most successful revivals in the history of the theatre. But his most successful revivals have been those that have been translated into other languages. And now, in a new production of Twelfth Night, the play is being translated into Japanese. The production is a collaboration between the British and Japanese theatre companies. The production is a collaboration between the British and Japanese theatre companies.



↓2009年3月23日付の「タイムズ」に取り上げられた「NINAGAWA 十二夜」。「男を演じる女を男が演じる」とある

Boys who play girls who play boys

The renowned Japanese director Yuho Ninagawa is trying his hand at the ancient traditions of kabuki to explore the sexual ambiguities in Twelfth Night. Lucy Powell reports from Tokyo

It is a beautiful evening in a small, intimate theatre in Tokyo. The director, Yuho Ninagawa, is on stage, surrounded by his cast of actors. He is speaking to them, gesturing with his hands. The actors are listening intently. The atmosphere is one of concentration and respect.



The origins of these actors are not far from their own country. They are all trained in the traditional arts of kabuki, and they bring with them a wealth of experience and skill. The production is a collaboration between the British and Japanese theatre companies.

ことは、まず間違いないだろうと思う。

カーテンコールは3度。最後に、菊五郎が蜷川を舞台へと誘ったとき、拍手は一層高まり、スタンディングオベーションが現実となった。また、演出家のデヴィッド・ルヴォーは、劇作家のトム・ストッパードと連れだつて現れ、私のすぐ前の列に座っていた。舞台が終わった直後、ルヴ

オーは冷静な口調で、「蜷川の作品のなかでも、ユニークなものとなったね」ともらしたのを覚えている。

この『NINAGAWA 十二夜』は、日本では、演出家の蜷川幸雄を迎えた歌舞伎の新作として話題となった。演劇賞も多数受賞した。それは古典を繰り返して上演するレパトリシアターとしての地位を確立するにつれて、新作が頻繁には上演されなくなつていった。しかし、このロンドンの地では、蜷川が英国で積み上げてきた舞台の連続のなかで捉えられている。つまりは、歌舞伎公演としての特異性があるかとの判断は後退し、蜷川の作品系列のなかで、どのように位置づけられるかが問題となっている。

この認識の差は、翌日から続々と出た劇評でも裏付けることができる。今、6紙の評が私の手元にある。星がすべてではない。文章がすべてではない。星がすべて

ろんだが、便宜的に紹介すると、満点が5つ星のうち、『タイムズ』、『フィナンシャル・タイムズ』は4つ星、『インディペンデント』と『デイリー・レグラフ』は3つ星、『ガーディアン』と『イブニング・スタンダード』が2つ星との評価であった。

5つ星と1つ星が例外的であることとを勘案すると、今回の『NINAGAWA 十二夜』に対する全体の評価は、まずは成功の部類に入らるだろうと思う。

『タイムズ』紙は、「蜷川幸雄は30年以上シエイクスピアに取り組んできたが、バービカン9度目の公演で初めて、この偉大な演出家が歌舞伎という由緒ある日本の芸術と、真正面から取り組んで制作したシエイクスピアの舞台である」と書き出し、「聡明かつ優雅なポピュラー・コメディとなった。傑出しており、しばしば異なる性を演じるこの舞台は、この上もなく巧緻に展開する」と、歌舞伎の特徴にも注目する。

『フィナンシャル・タイムズ』紙も「演出家・蜷川幸雄がシエイクスピア全作品を演出する長期プロジェクトのうち、最新の英国公演である。驚くべきことに、蜷川が歌舞伎を初めて演出する作品でもある」と始め、「蜷川は歌舞伎の

約束事に、より現代的な自由さと流動性を盛り込んだ」と理解を示している。

反対に、『インディペンデント』紙は「イエーツが言ったように、シェイクスピアという魚は『陸をはるかに離れ、海を泳いだ』が、日本は金魚鉢から離れていない」と容赦がない。

見渡すと英国の劇評は、あくまで、演出家の独自の解釈によって、舞台の芸術性が保証されるという20世紀以降の演出家至上主義を前提としている。俳優の藝をその核心とする歌舞伎の独自性に対する無理解を嘆くのはたやすいが、文言の一つひとつに敏感に反応し、その評価を悲観することはないと私は思う。

国際交流よりも英国の演劇シーンのなかで上演の意味が問われている

今回は、歌舞伎公演に対して、芸術的にすぐれ、極度に洗練されてはいるものの、歌舞伎の家を中心とした極東の舞踊団として評価が下されたわけではない。近年の野田秀樹がロンドン在住のスタッフ・キャストを中心に、作演出した『THE BEE』や『THE DIVER』と同様、海外のプロダクションだから国際交流として歓迎するのではなく、あくまで英国の演劇シーンのなかで、どのような意味を持つのが問われている。言いかえれば、『十二夜』の舞台と役柄が、過去のシェイクスピア上演

史のなかでどのようなであったかが参照され、評価が下されている。私はこの点だけでも、『NINAGAWA 十二夜』がバービカンシアターで上演された意味があったと考えている。

つつがなく5ステージの短い公演が終了し、千秋楽を迎えた。千秋楽の夜は、いつも達成感と空白感が入り交じっている。劇場のグリーンルームで行なわれた初日のパーティや日本大使館での盛大なレセプションを思い返しながら、バービカンからホテルに向かって、暗い夜道をひとり歩いた。何が成しえて、何が成しえなかったか。それは私自身の問題なのだと、こころのうちには言い聞かせていた。☺